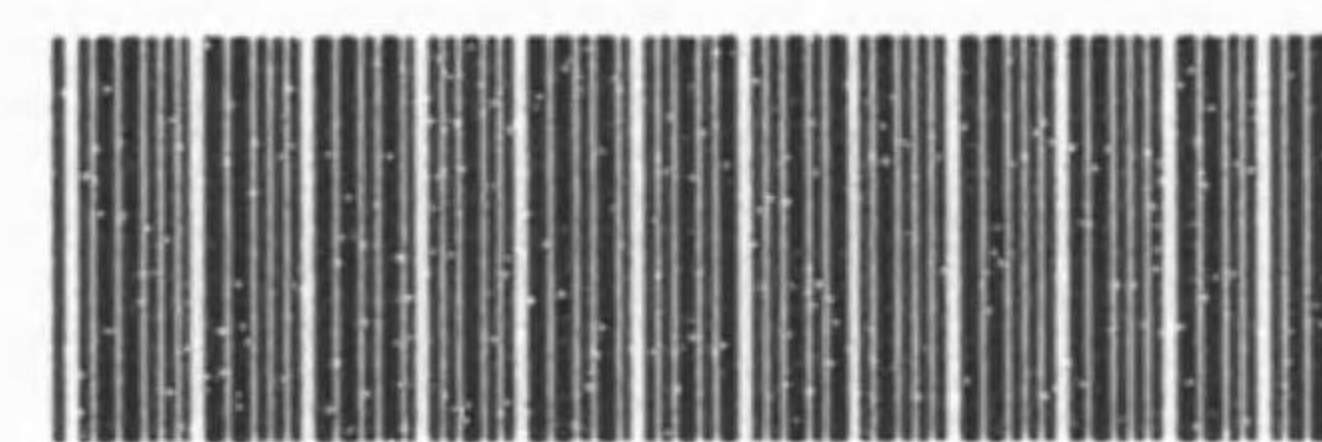


支那開發の根本方策

鷺澤與四二著

特 240

546



* 0010129000 *

3

0010129-000

特 240-546

支那開發の根本方策

鷺澤與四二・著

生活社

昭和 12

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月15付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

第二卷

高橋の根本方策

特 240
546

143



支那開發の
根本方策

鷺澤與四二著



支那開發の根本方策 目次

目次

序……………(七)

一、支那を正視せよ……………(一〇)

(イ) 國際的に見た支那……………(一〇)

(ロ) 對支政策の轉換……………(一三)

(ハ) 支那問題は我が國內問題……………(一九)

二、支那開發の具體策……………(二五)

(イ) 英國商權を封ぜよ……………(二五)

(ロ) 北支開發の中樞機關……………(二九)

(ハ) 支那市場化の確立策……………(三五)

目次

支那開發の根本方策

支那開發の根本方策

鷺澤與四二著

序

北支事變勃發後こゝに數ヶ月、至るところ破竹の勢を以て無敵皇軍の威武は既にして北支五省を制握し、上海南京の堅陣を粉碎して

支那の喉元を壓さへんとしてゐる。最早蔣介石政權は沈淪し、支那事變は正しく帝國の大々的勝利に歸せんとしてゐる。

然るにその大勝利の一面には貴い勇士の犠牲がある。忠勇なる將士の献身的努力がある。貴い赤誠の血潮が流れてゐるのである。

しからば如何にしてこの犠牲に報ゆべきであるか。我々國民はこの見地から事變の終結に萬全を期せねばならぬ。そうして多年の懸案たる支那問題を一舉に解決しなければならぬのである。

この解決こそが勇士の英靈に報ゆる唯一の花束であり、日本を躍進せしめる重大なる鍵であるからである。

即ち戦後の支那をどうするか、北支を如何にして經營するか、これが現下の國民にとつて最重要なる關心事てなければならぬ。我々國民は所謂舉國一致の形態の下に、一致團結、この問題の解決に奉公の誠を盡さねばならないのである。

然らば如何なる方策を行ふべきであるか、また日本國民は此際如何なる決心を持たねばならぬか、それには先づ支那事變後の時局に對する認識を充分認識してかゝらねばならぬ。

そこで私はこの時局を三つに分類して考へて行きたい。

支那を正視せよ

(イ) 國際的に見た支那

第一に、これを國際的に、即ちインターナショナルケースとして考へてみることである。

日本は、聯盟を脱退した時に、國際日本としての男になつたのだ。同時に、西洋歐米各國の羈絆を脱して、獨往自主の外交をなし得る舞臺に上つた。

しかしてそこに一つの失策を持たなかつたか。日本は聯盟を脱退する時に、日本と一緒に支那をも連れて歸るべきではなかつたか。國際聯盟に、支那を残して來たことが、實に、我々の「東洋自決主義」からいつて禍根だと思ふ。

従つてこんどの事件ではその禍根を一掃し、支那大陸に於ける日本の立場を如實に世界に向つて承認せしむる必要があると信ずる。

日本は、決して弱い支那を叩いて、ただ戦争氣分に陶醉してゐる時ではない。もはや支那問題は世界中のどの國にも御世話はかけないで、日本のみが決定權を持つものであるといふ意味を十分に世界

へ宣言し、確立する必要が大いにある。

だから、日本にとっては今回の事變は一つの劃時代的のものを見ることが出来るのである。ここに觀點を置いて日本が十分の自信をもつて頑張るのなら、みだりに列國に哀願するとか、或は列國の意向を訊かせるとか、又は日本の是なりと信ずる理由を論ずる必要は、些もない筈である。

即ち、日本の世界外交に於ける劃時代を自ら作る機會であると考へねばならぬと思ふ。

(口) 對支政策の轉換

第二は、對支問題の根本的な確立を圖ることである。

日本の、今までの對支外交は、外交そのものとしてもなつてゐなかつたと云ふだけでなく、國內的にも、何等の用意も持たなかつたのである。換言すれば、對支問題の外交もゼロだし政治もゼロであつた。

一體日本の風潮を顧れば、今日迄支那を論ずる事は、大英帝國を論ずるよりも遙かに薄かつたではないか。たとへていふならば、自

分の身内を考へることは他人の事を考へるよりも薄い、といふやうな間違つたことをやつてゐたのである。だから三十年間に亘つて二度も戦争をせねばならぬといふやうな結果に陥つてしまつたのである。

然らばこれは誰の責任であらうか。

私は、いまここに既往の責任を問はうとするのではないが、今後において、十分の覺悟と決心を、日本國民の一人々々に求めたいと思ふのである。

日本も、支那に對してこんどこそは、威信を十二分に確立したの

である。

従つて、今までのやうに排日、侮日をただく我慢し、——世間への氣がねをし、自省ばかりしてゐると云ふチツボケな量見は一擲しなればならぬと思ふ。

斯る意味に於いて、こんどの事變は、對支問題解決の最も愉快なる機會であるのである。

私は従來の無方策極る對支政策の缺陷をここに一一挙げたくないが、政府の方針といふか、朝野の意見といふか、従來の對支方針の重大な過誤だけは、國民もぜひ認識し、その過誤を訂正し革新して

行かねばならぬと思ふ。

翻つて見るに或ひは柳行李一つで支那に渡り百人のうち一人か二人かが、ダニの如く支那に喰ひつき、二十年三十年の粒々辛苦の結果、僅かに在留民として多少の權益を獲得したといふ人がある。或ひは、誰からも援けられることなく支那の奥地にまで天秤棒一本で働きに行つたといふ人、また、大陸經營に當り、卒先して身命を堵し支那に入つて来たといふ人、これ等の諸君に對して、日本の國家は從來どれだけの擁護をしてきたであらうか。

今日、南京政府は怪しからぬとか、國民黨は怪しからぬの聲は大

きいが、この國民黨を育てたのは誰か。この革命を援けたのは誰か。みな、日本である。

日本なかりせば、いかに孫逸仙が神様扱ひをされても、支那の今日の革命は起きてはゐなかつたのである。

然るに日本人は、革命の都合のいい時はチャホヤするが、ちよつと失意の地位が來ると、ヤレ孫逸仙はホラ吹きだと言つて、惜しげもなく捨ててしまふ。そして、この捨てられた革命を、横から出てきて拾つたのがロシアのボロジンであつた。

ところが、こんどは、これが共産黨だといつて叩く。

これを春秋の論法をもつてすれば、國民黨をロシアに近づかしめたのは日本の心ない仕業だ、日本がかやうにまで導いたといひ得るではないか。

畢竟日本の對支策に對する無定見の罪でなくして何であらうか。

國民革命が起きて清朝を倒した當時の日本の示したやうな情熱を、日本が今も尙、國を擧げて持續してきたならば、南京政府は共產黨どころでなく、南京政府は日本政府なりと言つて、むしろ世界各国が日本に抗議を申込んでくるやうな結果が起つたであらうと想像する。

日本にも口には、支那々々と言ふいはゆる支那通の政治家は澤山あるが、先頃まで漢文を廢止しろといった文部大臣さへもたてはなにか。

また、對支外交は、わが世界外交の根幹だといふ。そしてそれを取扱ふ外務省に於て、いつ、支那語を外交官試験に入れたか、かつてないのである。

更に言ふならば、教育亡國といはれる程の經費を、國民に出さしておきながら、どこの中學校に、支那語を正規の學科として教へてゐるところがあるか。

政治家は、支那に行けとはいふけれども、實際はどうだ？ 喰ひつめてしまふと、「支那にでも行かうかな」といふ以外に、支那に行つたことがあるか。

斯かる無定見を列擧してゐてはきりが無い。支那に關しては、全部が全部なつてゐなかつた事ばかりである。

徒らな明治時代の歐米崇拜熱は、今だに盛んなもので、頭の痛くなるやうな英語やフランス語を、しきりに上、中、小の學校で教へてゐるが、行くべき運命を持ち、治外法權を双肩に荷ふて堂々と行き得る支那語を教へ、支那の實狀を日本に教へてゐるところは何處

にもない。

また日本の小學校の讀本を見てもそうだ。支那の教科書は排日を教育してゐるといつて大いに騒いでゐるが、日本では尋常六年間の本の中に支那に關することは六つしか入つてゐない。

しかるに、西洋のアレキサンダー、ピーター大帝は偉いとか、ロンドンに廣いとか、さういつたやうな漠然とした歐米崇拜熱ばかりを教へてゐるのである。

まことに、情ない現狀であると云はねばならぬ。

従つてこの點に關しては、今日迄の日本の政治家は悉く落第であ

るといつてもいいと思ふ。

斯くの如く国内的に、支那への用意と知識のなさを練りかへしてゐるから、三十年間に二度も、國民の血と骨を犠牲にせねばならなかつたのである。

私は軍國主義者じゃないが、この點を考へると、海陸空皇軍の眞剣な活躍に改めて敬意を表さざるを得ないのである。

かつて日本は、政治外交によつて大きくなつた例は一つもないのである。日本の大きくなつたのは、いつでも戦争以外にはなかつた。これは歴史が明らかに教へてくれてゐる。

なぜさうであつたかといふと、爲すべき任務を持つものが怠慢で常に爲さないから、やむを得ず、力を使用しなければならぬといふ結果になつたのである。

陸軍あたりの方が支那大陸へ行つてゐるのを見れば、幼年學校で支那語を勉強して、大學に入つて、それから支那に留學する、そうして一、二、三といふ支那語のイロハからやりだすのである。

今日、支那に派遣されてゐる軍人で支那語の喋れない人は一人もゐない。支那語が出来てゐるから、柳條溝の一發によつて、三十年來解決の出来なかつた滿洲を一舉に解決し、蘆溝橋の一發によつて

北支を解決することが出来るのである。

而して、その解決の演題を見出したと云ふことは、軍人諸君が偉いといふよりは、むしろ日々支那の實情をその地で十分に研究して居たからかゝる成果を納め得たのである。

日本の多数は、支那がどつちにあるかも知らない人が、机上の空論で支那を論じてゐる。だから、實際の支那を知る事に甚だ遠い、只空理空論しか現はれて來ないのである。

日本人の見る支那及支那人、歐米人の見る支那及支那人、支那人の見る支那、といつたやうな、明らか區別をもつて俎上にのせられる。

た事も、研究された事もないのである。

だから今日まで、日本は支那に、あらゆる犠牲と莫大な経費を拂つて居りながら、いつか支那問題の解決が付かなかつたのである。

これほどまで支那に對して無關心であるかと思へば、歎いと云ふよりむしろ恐しくなつて來る。

斯くの如きは全く歴代政府の怠慢である。

その痛憤から、海、陸、空皇軍の軍人諸君が、一命を惜しまず、この破局を一掃してやるぞ、と今日蹶起された事に對しては、國民

はまづ、多大の感謝と敬意を拂はねばならぬ。

故に、對支問題の要は、支那の反省よりも、日本が支那を正視するといふことであり、支那を我國と同様に研究することである。

恐らくこんどの事變で、過去數十年間、支那に骨と血を埋めた諸君の靈魂は、今こそ、地下に身をふるはせて感激してゐるに相異あるまいと思ふ。我々が捨てた骨も血も、決して無駄ではなかつたと喜んでゐるだらうと想像する。現總理大臣近衛公の先公である篤磨公の如きは、卒先してこの戦局に志した先覺者である。その人のお子さんが、今日臺閣にあつて、全面的にあたられるといふことは、近

衛文磨公の仕事といふよりも、篤磨公の靈が致せるものなりと、我々も考へていいのである。

この點については、まだ、千、百、幾らでも盡す用意があるが、この際は個條的にくはしく申上げることが略すとする。

ただ、政府にまかせておいてはいけな。

支那問題は、全國民の關心事なのであり、我々日本人の生命線ともいふべきなのであるから、細心の注意と研究を、全國民が持つて頂きたいことを、私は、切望して止まないのである。

とにかく、今までのやうな、支那へ對する迂闊な事では、いけな

いのである。

今後支那に對して従前通りの事しか出来ないといふならば、それは、日本が戦に勝つて、しかも、自殺を遂げると同様の運命に陥るのである。

二度と二度びその轍を踏んではならぬと云ふことを私は特にこの際絶叫したいのである。朝野を問はず、全國民は、新たなる認識の下に支那研究に猛然と國を擧げて奮起することを慫慂したいのである。

私はこれが、戦後の國民の重大なる義務であると思ふ。

數多の英靈をして犬死に終らしむる勿れ。

これが即ち、戦局の最も優秀なる結果といはなければならぬと思ふ。

(ハ) 支那問題は我が國內問題

第三は、「支那人の支那」である。これを、日本の國內問題として見なければならぬ。

今日まで、一般國民は、支那の事を論じて支那問題は實に重大である、またわが兩民族の共存共榮と云ふことを叫びながら来たが、そ

れは一種の文字の遊戯にしか過ぎなかつた憾みがあるのである。
 敢えて私は断言するが今日迄日本に於て、支那問題を實際に説いた人が何人あつたか。即ち、日本と支那との不可分關係を十分に認識して叫んだ人が、幾人あつたか。八千萬國民の中に、支那問題は我國の農村問題なりと言つて、その眞意を了解し得る人が幾人あつたか。

政治家は、農村問題だといへば、補助金の問題だ、ヤレ肥料の問題だと、こんな程度の知識しかなくて、支那大陸が直ちに、日本の國內問題などと、考へを及ぼした先見の明のある人はなかつたではないか。

ないか。

私は、お道樂に、趣味に、支那問題を口にしてゐるのではない。また、單に征服慾感から言ふのでもないが、日本の外交にしろ、お體裁のみに掠はれてゐすぎはしないか。たゞ口先だけで支那に行け、支那は活舞臺なりと言つてゐるだけではないか。何等の實益を伴つてゐない。

ところで今日になつて見れば、支那問題はわが國內問題であると云ふことは、益々明瞭となつて來たのである。

なぜなら今日は、農村の子弟の血肉は滿洲の地に埋つてゐる。ま

た北支に上海に日本と支那は單に一片の儀禮でなく、貴い國民の血でつながつてゐる。これ以上の密接な關係が他にあらうか。即ち、支那大陸といふものは日本人勇士の墳墓の地となつたのである。

ゆゑに、私共は所謂支那問題を國內問題にまで還元して、その解決を計らねばならないのである。

我々が今日、單なる日支事變を遊戲的に解釋して居つたならば、事變から歸つてきた人は、何と思ふであらうか、内地へ歸つて見ると戦争には大勝したに拘はらず、家には生活苦あり、滯納處分が待つてゐると云ふ有様であればどうなるか、國民が國家への最高の義

務を盡したといふ反面に何物もない、といふ事になつた時、日本の社會問題は、容易ならざる爆發を來たす恐れが多分にある。そこで私は重ねて言ふ。

日本の繁榮も、ただ支那大陸の繁榮に歸し、また日本の衰微も支那大陸の今後の施設如何によつて決するものであるといふ事を、この際、全國民は深く認識して、この時局の收拾を國內的に考へねばならぬのである。

而してそれはひとり、政治家にまかせてはいけな。全國民舉つて、これに當るべきであると言ふ。

さきごろ、二十億の追加豫算の議會が開かれた時に、國民の代表者である議會に於て、一回の秘密會議さへ要求されなかつたといふ事實を考へて、果して、日本の今後に處する日本民族政治の根幹を如何にして進展せしめてゆくか、この重大問題は、そんなうかつな態度では到底成就しないのである。

我々は、戦費が百億といへども、この大事業を完成する爲には敢えて辭するものでもなく、その用意は十分に持つべきである。しかし、この百億は、一個人の働きではなくて、全國民の聲として、國民全體の實際として、之を示さねばならぬといふ時に、これを議了

する議會に於て、かゝる態度を以て通過せしめたことは、實に遺憾千萬と思ふ。

この點は國內問題として、實に重要に取扱はねばならぬと思ふ。ただ、儲ければよい、また、單に、戦争がすんで大なる災害がなくてよかつたといふやうな、單純な根性であるはならないのである。

この點で英國について教へられるのは、いはゆる大英帝國のグレートブリテンといふ字が如實に現れたことである。英國は大陸政策を完成した時にはじめて、グレートといふ字を使ひ始めたのである。

従つて日本に於てもこの機会に於て、支那大陸政策を完成した曉に、はじめて大日本帝國が現はれるのであると云ふ覺悟を持たねばならないと信ずる。

これらのことを深く論じてゆけば際限がないが、要は、全國民がこの事變後に、何等かのよき影響あらしめるやうに、最善の努力を拂はねばならぬと思ふのである。

つまり、國際的の支那時局。日本の對支政策。これに順應して日本國內の持つ時局。この三段に分けて、今後は、政府ばかりでなく實業家も爲政治家も教育家も、全國民各自が奮起し、事變後の日本の

工作を完全に行ひ、日本の將來の爲に、萬全の策をとることが必要だと信ずるのである。

これをして始めて、眞の舉國一致といふべきであると思ふのである。

支那開發の具體策

(イ) 英國商權を封ぜよ

然らば斯る見地に立つて具體的に支那を如何にすべきか、對支の經濟工作は如何にして行くべきであるか、特に北支の經濟工作は如何にして行くか、この點に就いて私は些か私見を披歴して見たい。

北支は漢人種の發祥の地である。黄河は、季節的に氾濫して、高

原地を肥沃の地と化し農業地としての缺くべからざる作用をなしてゐる。

この地方の農業は、いはゆる「黄土」といふ土でできており、殆んど肥料の要らないといふやうな土地であるから、農産物には最も適してゐる。

だから、まづもつて、農産物を豊富に作つて、市場の根源をなさしめる。それは、その農産物の買上げによつて支那人に金を與へ、そして農産物を奨励し、そこに日本に必要な原料を見出すといふやうなことをやつて開拓してゆくならば、その結果は支那の國民に購

賣力を持たせ結局日本品が餘計に出ると云ふことになつて必ずや成功すると思ふ。

なぜならここは、他では見られない、實に肥沃の土地であるからである。それは、山東省一つだけでも十分だと言つても差支へない。しかし農産物だけでは不十分だ。

然らば、北支一帯を、どんな方法によつて開拓すれば好いか、これは案ずるよりも産むが易しであつて、案外簡單明瞭な解決策があるのではないかと思ふ。

なぜかといふと、元來、支那の經濟は、悉く揚子江流域に限られ

てゐる。ところで、いまの戰時狀態では、この揚子江流域の經濟活動が停止されてゐる状態にある。

それで、この際、この方面の經濟施設をそつくりそのまま、目をつむつて北支へ移したら如何か。

たとへば、招商局といふ、日本の郵船會社のやうなものが上海にある。これは英國の資本系だが、沿岸貿易第一だといふ日本が、この招商局に、何等の手をつけることが出来ないで、そこで致し方なく、日清汽船を使つて居つた。

これらの招商局を、青島に設けてみるのは如何か。天津に設ける

といふことは如何か。

また、山西の石炭は一噸二百圓もとらなければ採算が合はぬといふならば、資金を手に入れて、緩遠、大同、大營其他の附近に於て工場を建てるならば、この山西の石炭は、殆んどタダで使へやう。

更にまた、經濟活動の基礎をなすべき金融機關である。

この點では日本は、英國のやり方を學ばねばならぬ。上海あたりには、五大銀行といつて、銀行は澤山あるが、悲しい哉、日本の國民及び日本の政府は、支那に投資してゐるかといふと、さつぱり投資して居らぬ。支那に、預金を持つてゐるものもないのである。

これと反對に英國は、揚子江流域に於て商權を失つたといふが、香港上海銀行が持つてゐる支那人の銀預金といふものは、一體、どのくらいあるかといふことは現在の世界の謎である。いまから二十年前あたりは、二億圓と稱せられたが、恐らく今日は、十億圓になつてゐるか、二十億になつてゐるかは、想像外である。

この銀資本があるから、英國の商權が今日尙、生き残つてゐるのである。

日本の銀行は、只手形の割引ばかりしてゐる。金銀の差額の相場をしてゐるのである。

第一日本の銀行は、銀預金を取扱はない。預金としての銀を認めないのである。

日本の商品は、支那市場に於て風靡してゐるといふが、その基礎の金融は、日本は凡ゆる點で金本位である。

だから、金の所在地、即ち東京の景氣が悪ければ、支那の商賣人はどしどし引上げてしまふといふのが、日本の對支經濟の缺陷である。

(口) 北支開發の中樞機關

これが重大問題である。今後、北支の市場化を計るといふが、この金融機關の整備を第一にしないと、商人が商品を持つて行つても賣ることができない。しかるに現在でも、臺灣銀行、朝鮮銀行がいといつて紙幣を發行してゐるが、そんなけちなローカルカラーを出すべきではない。地方色をいれたものではないけない。もつと堂々たる大規模のものを設置しなければならぬ。

それには正金銀行の札でもいいし、日本銀行の札でもいい、臺灣銀行、朝鮮銀行の札でもいいといふやうな、ちつぽけな問題ではない。戰時に對する、金融發展經濟の基礎をなすものを創設して、も

つと大局的な措置を講じなければならぬと思ふ。

それについては先年、滙業銀行といふのを日支合辦の銀資本で建てた。それが今日、天津にある。本店は、支那人の預金を納めてゐるが、蔣介石革命が出現し南京政府が出来た瞬間に閉店して今日尙そのままになつてゐる。支那人の預金をもつて日本の銀行は潰れてゐるのである。

上海に於ては、香港、上海銀行は支那人の預金は埋高くなつて、今日の支那人は有難がつてゐる時に、日本の銀行は潰れてゐるといふ状態だ。

これでは經濟的發展は出来るといふものではない。

だから、北支開發には、まづ手始めとして、銀行、金融のことを圖るとすれば、滙業銀行を開店して、支那人の感情を良くしてやらねばならぬ。それから出發して、着々と進めてゆくのが最もよい方法の一つである。

また、南方に於ては、漢冶萍の製鐵事業がある。これには日本の資本も少しは入つてゐるが、それを、北支に、工場を新設して、現在、日本に入つてゐる安徽省の鐵礦、その他、腐るほどあるといふ北支の鐵を、北支に於て、精鐵化するといふことも、一つの企業で

ある。

まあ、これらのいち／＼を擧げてみれば、數へ切れぬほど澤山ある。

とにかく今日の狀勢で、南方に於て閉鎖してあるものをどし／＼北支に移してゆくといふことが緊要だと考へる。

更に、基礎的な問題として指摘したいのは、支那に對する經濟投資發展とか、また、資源調査といふことを言つてゐるが、（これは必ずしも支那ばかりでなく、日本内地でも同様であるが）日本の財界には、産れ出るものを取りあげるところの産婆役がないのである。む

しろ、死んでゆく骨を焼く役目はあるが、この産婆役の會社がない。昔は、澁澤子爵が委員長といふことになる、株がプレミアムがついて何倍となつた。今日では、郷誠之助君が委員長になると何倍とはなる。しかるに實際は、會社が出来上つてみると、澁澤さんの株は一株もない。さうかといつて、それらの知名人の名を得られなければ永久に會社は産まれないのである。これではいけない。

従つて北支を開發するには、北支の資源を取り上げて、財界の仲介機關とするところの、いはゆるアメリカで四十年前に、始まり今日のアメリカを産んだところのトラストカンパニーに似たものを、

ぜひこの際作るべきであると思ふ。

今日は、各會社が自己の調査局を持つてゐる。しかしこの調査は、依然として、殆んど全部は「死體解剖」である。統計の遊戯である。生きた臨床的のものは一つもない。

だから今日、どこの會社へ行つてみても、調査はしてゐるけれども、直に間尺に合ふものは殆んど絶無と云つていゝ位だ。

そこでトラスト・カンパニーの如きものが出来ればその點は極めて確實にして而も簡便に行くのである。

たとへば、山西の山奥にある事業をそのまま持つてきて、東京の

資本家を招かうとしても招けるものでない。

故に、まづ第一に、信託會社を作つてその仲介の勞をとらせたらよい。山西の信託會社に於て取り入れて、それを改めて、財界の人が食べるやうな形に直せば、投資しやすいのである。同時に、投資を躊躇されたやうな場合には、信託會社自らが行ふことが必要である。

ともかく、北支の經濟開發の近途は、まづ信託會社のやうなものを作つて、その仲介機關をして、支那の資源と日本の財界との間の橋渡しをせねばならぬと思ふ。これが非常なる活躍をすれば、必ず

や發展する。

ただ、重大なポイントは、これらの機關を運用する「人」で、私利私慾を離れて、しかして、國家の大局の上から日支兩國の經濟的發展の爲に盡すといふやうな、白熱的な精神と、技倆を持った人でなければならぬことは勿論である。

會社は生まれても「人」に於て、眞に適任者を得なければ甚だ困難であるが、しかし、こんな機關も、今日に於てこそ速に設立されるべきものであらうと思ふ。

しかし、ここに重大な悩みが一つある。それは、支那の現實の姿

を日本人が知らなすぎる點である。いはゆる支那通は多いとはいへ、今まで、支那くらの研究を閉却されたところはないのである。

その爲に、さあ北支經濟化を行ふといつても、どこにも成案がない。

たとえば、滿蒙の羊毛といふが「滿蒙の羊毛が役に立ちますか」と同業者自身が質問をする。北支の棉花といふと「支那で棉花がてきますか」といふやうな程度で、誠に困つたものである。

また或者は、北支の經濟化は誠によい。しかしまづ第一に、日本は金が足りないから産金事業を起したらよからうと云ふのである。

一應尤な話だが、いまは戦争中で金山がどこにあるか判らないのに、産金事業を起すどころの騒ぎではない。山にごろ／＼してゐる固い黄色い色をしてゐる岩ばかりが金ではないのである。産金事業くらひ金のかかる仕事はないのだ。日本人はすぐ、金が出なければ駄目だ、石炭がとれなければつまらぬといふが、棉花それ自體が金だ。畑に播いた棉が一封度とれる。それが金である。北支の遊牧の民が引きずつてゐる羊の毛を切ればそれが金である。鑛夫を募つて行つて、金鑛を探す。そんな事だけでは、日支兩民族を一括する經濟とか政治とかいふものは出來ないのである。

そこで先づもつて、經濟化といふことは、さう遠方に行くことではなくして、滿蒙、北支の市場化を計ることが急務であると思ふ。このマーケット化をすれば、日本の商品とその市場に賣り、支那人を安んじて買はせることが出来るのである。

(ハ) 支那市場の確立策

ところで北支の市場化は、いはゆる國內の中小工業者救済の眼目であつて、國內問題としても極めて重大である。即ち、鐘紡であるとか東洋紡であるとか、これらの大資本の對支企業會社は、かく、

戦局の見透しをつけてゐるから、今は損をしても、この損に堪え、時來つて解決した場合には、その數倍の利益を得て見せるといふ努力も、確信もあるから堪えられるが、一番に困るのは、中小商工業者の打撃である。

支那に於ける商業は日本が世界第一であるが、その商品の大部分は、日本内地の中小商工業者の家内工業から産み出すものである。一二臺の機械を買込んで、そしてただ間屋だのみで、その製品を問屋に持つてきて、それを北支へ送り出す。これが即ち支那の南北全土を風靡してゐるところの日本の商品の勇躍といふことである。

それが今日、戦局で支那の市場が杜絶してしまつた。随つて一番に困るものはこれらの人々である。これらの中小商工業者には訴へるところがない。夜逃げをするとか、或は商賣替へをしつつあるものもある。しかも世間からは之を重大視されない。西部戦線異状なしと同一に片附けられてゐるのが今日の現状である。

しかし、これらの人を救ふといふのは、必ずしも慈善事業だと云ふ觀念ではない。これは、對支經濟の大方針となすのみならず、わが國內問題解決の鍵でもあるのである。

といふのは、今月よりは來月、といふ如く暮正月に至つての景氣

は益々深刻になつて來るだらう。製品は賣れない。息子は戰場に出てゐる。外の商賣替へしやうとしても、資金をどこに求めるか。こんな氣毒な人を、内に於ては救済し、その製品を北支に賣出す機會を與へる上からいつても、一日も早く、北支の市場化を確立しなければならぬ。これは拙速主義でもよい。その確立が、一日一時も早い方がいいのである。

紡績事業の如きは、大きな水の流れてあるけれども、支那全土に入るものはこれらの人々、中小商工業者の製品であるから、これを救済する爲には一日も早く、北支の市場化を計つて、北支の購買力

を養ひ、どしどし商品を開かねばならない。

斯くの如く支那より必要な原料を取り入れて支那の國民に購買力を起す、そうしてその出來た購買力に向つて日本品を買はせる、その爲めに北支を市場化して行く、その結果は日本の工業が榮える、商業が榮える、農村が潤ふと云ふことになつて、こゝに始めて兩國の生活に觸れた日支の親善が具現し、東洋民族に眞の平和が齎されるものであると私は確信する。

(完)

拓務大臣 大谷尊由閣下題字
 朝鮮銀行 公森太郎氏序文
 副總裁

小倉章宏著 北支の新生活案内

定價壹圓五拾錢

四六判三百二十頁・假裝地圖・寫真澤山挿入・十二月五日發賣

全國書店にあります。品切れの節は本社宛御注文下さい。御注文は送料をそへて振替でお申し込みになるのが一番便利です。小爲替でもよく、切手代用は一割増のこと。

目次 前編・總説

- 一、北支の地域とその特質
- (一) 北支の地域
- (二) 面積と人口
- (三) 氣候と風土
- (四) 偉大な黄河と流域
- (五) 南北支那人の相違
- 二、北支の歴史的地位
- (一) 北支の歴史的地位
- (二) 支那本變前の北支
- 三、支政情
- (一) 支政情
- (二) 支政情發生後の北支
- (三) 支政情發生後の北支
- (四) 支政情發生後の北支
- (五) 支政情發生後の北支

北支の事情を知り度い人の爲に
 地理、經濟、社會、人情、風俗等
 あらゆる方面に、これ位詳しく正しく書くことは、二十年を北支に暮した著者にして、はじめて爲し得る事だ

- 三、北支の經濟開發
- (一) 北支の經濟開發
- (二) 北支の經濟開發
- (三) 北支の經濟開發
- (四) 北支の經濟開發
- (五) 北支の經濟開發
- 四、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 五、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 六、北支の重要都市通覽
- (一) 北支の重要都市通覽
- (二) 北支の重要都市通覽
- (三) 北支の重要都市通覽
- (四) 北支の重要都市通覽
- (五) 北支の重要都市通覽
- 七、北支の農業
- (一) 北支の農業
- (二) 北支の農業
- (三) 北支の農業
- (四) 北支の農業
- (五) 北支の農業
- 八、北支の工業
- (一) 北支の工業
- (二) 北支の工業
- (三) 北支の工業
- (四) 北支の工業
- (五) 北支の工業
- 九、北支の商業
- (一) 北支の商業
- (二) 北支の商業
- (三) 北支の商業
- (四) 北支の商業
- (五) 北支の商業
- 十、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 十一、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 十二、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 十三、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 十四、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 十五、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 十六、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 十七、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 十八、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 十九、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 二十、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 二十一、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 二十二、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 二十三、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 二十四、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 二十五、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 二十六、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 二十七、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 二十八、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 二十九、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 三十、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 三十一、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 三十二、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 三十三、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 三十四、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 三十五、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 三十六、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 三十七、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 三十八、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 三十九、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 四十、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 四十一、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 四十二、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 四十三、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 四十四、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 四十五、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 四十六、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 四十七、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 四十八、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通
- 四十九、北支の生活
- (一) 北支の生活
- (二) 北支の生活
- (三) 北支の生活
- (四) 北支の生活
- (五) 北支の生活
- 五十、北支の交通
- (一) 北支の交通
- (二) 北支の交通
- (三) 北支の交通
- (四) 北支の交通
- (五) 北支の交通

特別附録

- 一、北支五省
- 二、北支の交通
- 三、北支の生活
- 四、北支の交通
- 五、北支の生活
- 六、北支の交通
- 七、北支の生活
- 八、北支の交通
- 九、北支の生活
- 十、北支の交通
- 十一、北支の生活
- 十二、北支の交通
- 十三、北支の生活
- 十四、北支の交通
- 十五、北支の生活
- 十六、北支の交通
- 十七、北支の生活
- 十八、北支の交通
- 十九、北支の生活
- 二十、北支の交通
- 二十一、北支の生活
- 二十二、北支の交通
- 二十三、北支の生活
- 二十四、北支の交通
- 二十五、北支の生活
- 二十六、北支の交通
- 二十七、北支の生活
- 二十八、北支の交通
- 二十九、北支の生活
- 三十、北支の交通
- 三十一、北支の生活
- 三十二、北支の交通
- 三十三、北支の生活
- 三十四、北支の交通
- 三十五、北支の生活
- 三十六、北支の交通
- 三十七、北支の生活
- 三十八、北支の交通
- 三十九、北支の生活
- 四十、北支の交通
- 四十一、北支の生活
- 四十二、北支の交通
- 四十三、北支の生活
- 四十四、北支の交通
- 四十五、北支の生活
- 四十六、北支の交通
- 四十七、北支の生活
- 四十八、北支の交通
- 四十九、北支の生活
- 五十、北支の交通
- 五十一、北支の生活
- 五十二、北支の交通
- 五十三、北支の生活
- 五十四、北支の交通
- 五十五、北支の生活
- 五十六、北支の交通
- 五十七、北支の生活
- 五十八、北支の交通
- 五十九、北支の生活
- 六十、北支の交通
- 六十一、北支の生活
- 六十二、北支の交通
- 六十三、北支の生活
- 六十四、北支の交通
- 六十五、北支の生活
- 六十六、北支の交通
- 六十七、北支の生活
- 六十八、北支の交通
- 六十九、北支の生活
- 七十、北支の交通
- 七十一、北支の生活
- 七十二、北支の交通
- 七十三、北支の生活
- 七十四、北支の交通
- 七十五、北支の生活
- 七十六、北支の交通
- 七十七、北支の生活
- 七十八、北支の交通
- 七十九、北支の生活
- 八十、北支の交通
- 八十一、北支の生活
- 八十二、北支の交通
- 八十三、北支の生活
- 八十四、北支の交通
- 八十五、北支の生活
- 八十六、北支の交通
- 八十七、北支の生活
- 八十八、北支の交通
- 八十九、北支の生活
- 九十、北支の交通
- 九十一、北支の生活
- 九十二、北支の交通
- 九十三、北支の生活
- 九十四、北支の交通
- 九十五、北支の生活
- 九十六、北支の交通
- 九十七、北支の生活
- 九十八、北支の交通
- 九十九、北支の生活
- 一百、北支の交通

北支へ旅行したい人の爲に
 旅費、航路、汽車の時間表、ホテルの紹介、宿泊料、自動車、人力車、航空路のことから、沿線の説明まで最も完全な旅行案内書。

北支で事業を興したい人の爲に
 北支は何を要求してゐるか、小は五百圓千圓の小商賣はじめる人から、大は何億圓の資本を要する大企業まで、知らなければならぬ手引書。

北支で新生活を始めた人の爲に
 氣候、物價、家屋、習慣、取引狀態等北支で生活する日本人の爲に、必要な實際知識はすべて網羅した。

發行所 生活社
 東京市神田區銀台町三ノ六錦町ビル
 振替口座番東京四三三〇一
 電話神田三三三五・三三八一

初版・再版・三版・四版・五版
遂に、五萬部を賣り盡した
時變下の名著！！

戦争に勝つても、そこに「或る結果」が来る。
それは何人も避けられない、非常な「或る結果」だ。
その時、政府はどうするつもりか。
だから、國民はどうしなければならぬか。
その手段は、茲に決つた。
われら實際生活の指導者。而して責任者。我等の商工
大臣吉野信次氏が、心血を濺いで、斯くすべきと、自分
の腹藏をすつかり打ち開けて、全日本國民に懇へた。
この書を讀まずして「或る結果」が來た時、生活の方

向を失ふな！

商工
大臣

吉野信次 著

日本國民に 懇ふ

定價金三十錢

六錢并

發行所 生活社

東京市神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル
電話 神田 三六三五番・三六八一番
板橋 口 東京 四三三〇番

鐵日

昭和十二年十二月五日印刷
昭和十二年十二月十日發行
定價十錢

不許複製

著者 鷺澤與四二
發行者 鐵村大二郎
東京市神田區鍛冶町三丁目六銅町ビル
印刷者 渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷所 中外印刷株式會社
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所 東京市神田區鍛冶町三丁目六銅町ビル
生活社

振替口座番號東京四三三〇一番
電話神田 三六三五・三六八一番

生活社發行
定價金十錢